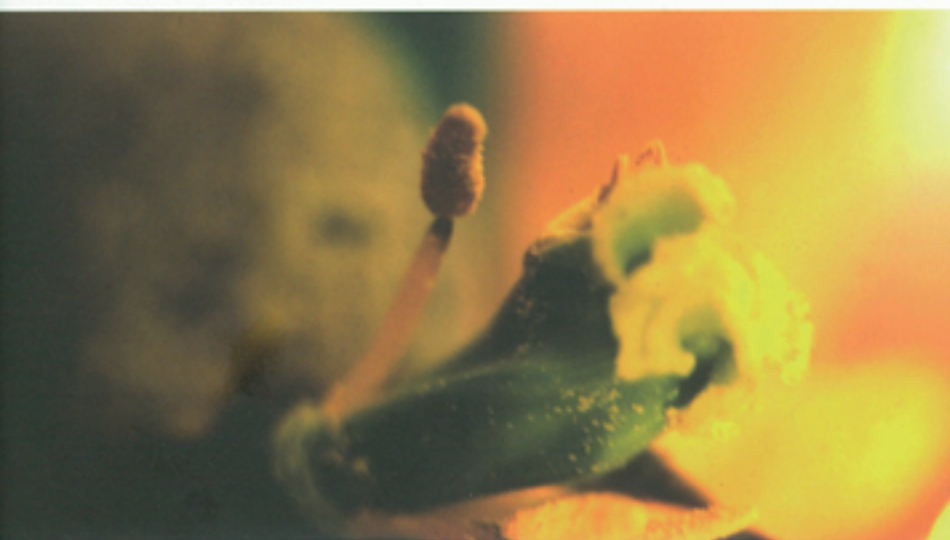


やまだようこ 著作集 第2巻

ことばのはじまり

意味と表象



子どもがことばを話しはじめるプロセスは不思議そのもの。
それは世界が意味あるものとしてまとめられていき、
ほやほやのイメージ卵がはじめて生まれてくる過程でもある。

「ことばの前のことば」刊行から30余年。

未刊だった待望の続巻、ついに刊行。

本巻ではことばを話しはじめ、イメージの世界を基盤にして世界と対しはじめる
1歳代前半に焦点をあて、「ことば」と身振りの発生プロセスをたどる。

新曜社

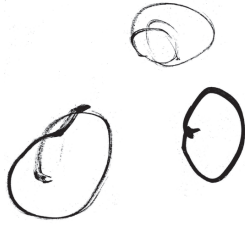
やまだようこ 著作集 第2巻

ことばのはじまり

意味と表象

新曜社

目次



I

ことばのはじまり ——ことばが生まれるすじみち2



第1部 名づけのはじまり

1章 ことの端^はとしてのことば

- 1 片言の時代 13
- 2 最初のことば 22
- 3 一語発話の意味 39
- 4 何によって意味づけるのか 58
- 5 名づけるということ 70

2章 共感のことば

- 1 (こころ) 世界のことば 81
- 2 音声の響きと意味の響き 99



第2部 身のことば

3章 指示 — あそこを見て

- 1 叙述の指さし 117
- 2 表象には無理な指さし 132

4章 行動のかた(方・型) — これはああするもの

- 1 物を用途にあわせて使う — 慣用操作 141
- 2 こうしてああするの — 手順の表示 155
- 3 「行動のかた」とことば 169

81

117

141

5章 身振り ― 手振りを中心に

- 1 バイバイの手振り 177
- 2 「こと」を表現する身振り 200
- 3 我が身と身振り 208
- 4 共に揺れることと身振り 218

II

ことが生まれる場所^{トボス}

6章 意味生成の場所^{トボス}〔こと〕

- 1 認識のベースとしての場所 231
- 2 心理的場所^{トボス}〔こと〕 240
- 3 表象の拠所^{よりどころ}〔こと〕 256
- 4 自己の居場所〔こと〕 265

7章 記号としての「これ」——世界よ小さく小さくなあれ 281

- 1 表象機能とは 281
- 2 表象機能の性質 289
- 3 意味記号の区分 297
- 4 意味記号の媒体 309

8章 「あわせる」と「うつす」——表象を生みだす働き 311

- 1 「あわせる」ということ——同一化の概念 311
- 2 「うつす」ということ——場所移動の概念 315

おわりに(草稿) 1988年 331
おわりに(新版) 2019年 334

初出一覧と関連資料 (7)

索引 (1)

カバー写真||林 恵子/装幀||虎尾 隆

■「ことばが生まれるすじみち」

この本は、子どもの0歳から3歳までの日常生活における行動観察をもとに、子どもの心理世界で本質的に何が起きているのかを探りながら、「ことばが生まれるすじみち」にいくつかの理論的道標をつくることをめざすシリーズの2巻目である。

このシリーズは、母親が日誌に記したひとりの子どもの日常観察をもとに、子どものことばが生まれる現場から、「ことばとは何か」を問いかけるものである。ひとりの子どものことばが生まれる発生過程を、文脈を大切にして詳細に追いかけてながら、「ことばとは何か」を根源的に思索し、新たな人間観を照射してみたいと考えている。

本巻では、特に1歳代前半に焦点をあてて、「ことば」が生まれてくるプロセスと、「身のことば」というべき身振りの発生プロセスをたどっていききたい。

■世界が意味つけられるころ

ことばが生まれるとは、どのようなことなのか、何がどのように変わるのだろうか。それは、ただ「マンマ」「プー」など片言が話せるようになることだけではないだろう。

1歳ころから、子どもはことばを話しはじめ、世界を名づけはじめ。ことばは、親が使っていることばをそのまま模倣したり、外から教えた名前をまねるといような単純なプロセスで発達するのではない。ことばが生まれるには、子どものなかに世界をまとめあげイメージ化していく認識のしかた、世界を意味づける働きが育たなければならぬ。

ことばによって、世界は意味あるものになる。ことばによって世界は根本的に変化する。私たちが見ている世界は、光と影が瞬時に変化しながら絶えず動いている動的な世界、ありのままの現象世界ではなく、意味の世界である。今、私の目の前にある本も机も、部屋の壁も天井も、窓から見える緑の山々も澄んだ青い空も、ことばによって名づけられることで恒常化し安定して、ここにあるものとして意味づけられている。私たちは、意味世界のなかに住んでいるのである。

ことばが生まれるころ、子どもの世界は意味づけられていく。子どもは、世界の見方を大きく変化させ、意味ある世界、生き生きと息づくイメージの世界を基盤にして世界と対しはじめる。このような「意味のはじまり」こそ、ことばによって世界が新たなのちを帯びて息づきはじめる転換点だといえよう。

世界が意味づけられるとは、世界が有機的にむすびついて見えてくることだと言ってもよいかもしれない。それまで空中の塵ちりのようにキラリと視野に現われては消えていくにすぎなかった断片かけらのような物体は、ことばによって名づけられる。ものに名前がつけられると、それは他の名前をもつものたちと関係づけられ、一

定のルールで運行する星座のような網目のなかへ位置づけられて、居場所をもつ。星たちは断片的に行き交う単なるきらめきではなく、自分がいる視点から見た形でまとまり、さまざまな名前の星座としてかがやきはじめ。

ことばの意味は、人びとが共同体のなかで長い年月をかけて育んできた人類の財産というべき「ものの見方」の結晶である。子どもは、ことばによって、その意味世界の住人になるのである。子どもは人びとが育んできた共同の場所^{トポス}に根っこを生やし、意味の森に住み、意味の天空を眺め、意味の食物を食べはじめる。意味の生成は、歴史と文化によって育まれてきた人類の世界観の継承であり生成である。

■意味と表象の発生

1歳児の身のまわりに起こるさまざまな「できごと」は、もう0歳初期のように個々バラバラのものではない。目の前にくりひろげられている今ここで起こっている、この「こと」は、前に見たことがある、あの「こと」へと有機的にむすばれ意味づけられていく。「意味のはじまり」は、表象化と記号化とものごたりのはじまりでもある。世界が現前にみえるもの、今ここにあるものだけではなく、かつてあった過去のものや未来の予感ともむすびつけられる。

意味と表象の発生によって、常に流れ去っていく現在という瞬間は、その見かけの変化を超えた変わらないものへと変換される。それは世界を眺める認識の枠組となり、感情の寄り処^{トコロ}となり、さまざまな人びとを位置づける基準ともなる。

そして今見ている現前の世界は見えない世界と重ね合わされ、この世界はあそこの世界と結ばれて、二重構造で眺められるようになる。ここにないものが、ここに居ながらまざまざと見えるようになる。今日

(現在)のなかに昨日(過去)が、そして明日(未来)が連結され、世界は構造化されていく。子どもが愛着をもつこの人という特別の人と、そのほかの人びととの差異化が行われる。

この時代に子どもが身にうつし、身に仕舞いこみ、身をもって体験する「できごと」は多様で生き生きしていて鮮やかで驚きに満ちている。しかしその体験世界の「できごと」の豊かさに比べると、表現できる「ことば」は、まさに「こと」の端、片言にすぎない。

1歳代は、片言の時代である。「ああ!」「まあ!」と感嘆詞がたらなるような「知ること」の驚き、次々とものがつながりをもってまとめられていく「わかること」の喜び、それらによって体験世界は日々豊かになる。子どもはそれを自分のまわりの人びとも当然わかってほしいと思う。だが片言のことばはそれを表現するにはあまりにも貧弱な媒体でしかない。

気持ち相手が相手にうまく伝わらないので、わかることと、やれることとのギャップの大きさに当の子どももいらだつ。しかし子どもに問いかけて説明を求めても、それに応じられるほどには開かれた態度も公共化された表現の手段もないから、問いつめるほどにわからなくなってしまう。コミュニケーションをことばだけに頼っていたのでは、子どもも大人も途方にくれるほかはないだろう。

しかしそれは、音声言語としてのことばだけを特別扱いしすぎだからである。特に1歳代は、音声による片言と並んで、我が身を使う「身のことば」とでもいうべき身振りなどの多様な表象行動が生活のなかで重要な役割を果たすことに目を向けねばならない。

この本でも私の視点は、0歳代の乳児の心理を扱った第1巻の『ことばの前のことば』と同じように、ことばという氷山を海面下で支える言語機能「ことばにならない行為」のほうにある。現実生活のなかでの子どもの振る舞いをクローズアップすることで、ことばの働きを逆照射し、ことばの本質を考えていきたい。

ことばが現実生活において主導権をもつ時代は、片言を話しはじめたとたんにはすぐはじまるわけではない。

最初のことばの発達は遅々としていることが多い。新しいことばは出そうでなかなか出ず、ほんの少しずつしか増えない。ことばが現前の世界を統制し主導権をもつには、イメージの世界が現前の世界を超え逆転劇が演じられるまでの長いプロセスが必要である。

言語機能の発達にとって大切なのは、よく知らない新しいことを次々に空疎にしゃべる能力ではなく、ひとつのことばに、どれだけの内実のある意味をもちこめるかということである。量の増大が質の変化を導くといわれるが、必ずしもそうではないだろう。量の不自由が質を高くすることがある。1つのことばだけでも真に意味あるものとして使えることが重要である。ことばの意味作用の核心がつかめれば、あとはさまざまに応用できるのである。

この時期の子どもが饒舌じょうせつではなくわずかな片言しかもたないこと、1つか2つだけのことばを生活のあらゆる場面でひんばんに試してみても、それらをじっくりと身にうつしていくこと、発達が急速ではなく遅々としていることは、すばらしいことである。

それはイメージの世界が大きくはばたく前の夜明け前、爆発的な飛躍の前の、よちよちではあるが大切な助走である。子どものこの時期をとりわけ大切にして、しんぼう強くつきあってみよう。

■身振り和我が身

ことばは、本来的に我が身をゆるがせて「うたう」ものである。第1巻で述べたように、ことばは、本来的に人と人のあいだで響きあい、共に振動させる「うた」である。今、ここという場所にいる人びとの声や情動的なふるえは伝染し、我が身も相手も同時に共鳴的に揺さぶられる。

遊ぶ子供の声聞けば

我が身さへこそ動かうごかるれ
(梁塵秘抄)

0歳のはじめから人は「うたう」存在として生まれ、自己と他者の身体が溶け合った「ここ」という場所で営まれる共同行為として、コミュニケーションがはじまる。しかし、「うたう」行為が、そのままことばで語る行為へと直結するわけではない。「うたう」ことで共同化する行為の文脈から、いったん離脱し脱文脈化して、距離化し、記号化しなければ、「ことば」は生まれない。

「うたう」行為から、「ことば」へ移行する境界領域では、「身のことば」というべき「身振り」が豊かなコミュニケーション世界をつくりだす。

子どもは、1歳ころから表象的な身振りをはじめ。バイバイを意味する手振りや、イヤを意味する首の横振りなどである。このような身振りは、0歳初めから見られる共鳴的な「うたう」行動、興奮や情動にともない共振的に身をふるう（奮う、振るう、震う）行動に基礎をおいている。しかし、この時期に情動から離れて、身の一端を使って別の意味を表す記号として根本的に改変される。身の端を媒体にして、この端としての「ことば」の機能を持ち始めるのである。

身振りは、周りの人びとに見世物や芸として披露される社交術になり、相手とウソのやりとりをするゲームとなり、「ふりをする」行動から「ふりつける」演技、「ぶりっこ」や「ごっこ」へと発展する。身振りは、身をもって相手とはりあう自己主張の強力な武器になり、身の範囲を超える自分の「つもり」を表現する。

身振りは、他者の行為を我が身に「うつし」て模倣するときには、注意を外方向に向ける外界志向的な認識とかかわる。しかし、その行為を我が身で再現するときには、注意を内方向へUターンさせて、我が身へ向かう自己志向的な認識にむすびつく。

このような自己志向的な認識は、自分の身体に気づかせ、ボディ・イメージを形成し、自己の身体を基にした認識の枠組としての心理的場所^{トポス}をつくりだすと考えられる。

1歳代にあらわれる「私（自分）」という覚知は、世界の中心をつくる働きでもある。自己は、世界を関連づけてまとめる意味生成の基盤としての心理的場所の中心に生まれると考えられる。「私」というものに気づく過程はまた、私と違う「他者」を覚知するプロセスでもある。

このように表象的身振りの発生と、自己や他者認識の発生は、同じ土壌から生みだされると考えられる。それは、同時期にあらわれる有意味語「ことば」の発生と深くむすびついている。

■意味世界と「私」の発生

1歳代には、意味化のはじまりと並んでもうひとつ、決定的に重要な心理的発達がみられる。それは自分「私」というものが、おぼろげながらも覚知されはじめることである。ことばのはじまりと、私のめばえは、ほぼ同時期に両行^{りょうこう}しながら発達する。それは、偶然ではないだろう。

意味は、「(こ)こ」という身近で共感的な場所で体験を共にする「私たち」によって共同生成される。世界の意味づけが、独創的でありながら最初から社会性を帯びているのは、それが本来的に共同行為によってなされるからである。自分は、自^{おの}ずから、そして自^{みづか}ら、「私たち」の領域である「心理的場所^{トポス}」の核として覚知され、それを認識と感情の基盤にして、まわりの人や物を眺め、位置づけ、意味づけ、世界を体制化していく。

意味の発生と自己の生成とは、今まで別々に考察されがちであったが、自己の居場所としての「心理的場所^{トポス}」の概念をベースにおくことによって、両者は統一的に理論化されるだろう。

1歳代には「表象」と「私」とが、ほぼ同時に発生し両行して発達する。それらは共同して働き、外界のものを取り入れまともていく認識の枠組をつくるという点でも、人と人との感情的コミュニケーションの枠組をつくるという点でも、乳児と大人とのあいだを隔てて横たわっていた根本的な溝をとびこえるような、画期的な心理構造の変化をもたらすと考えられる。

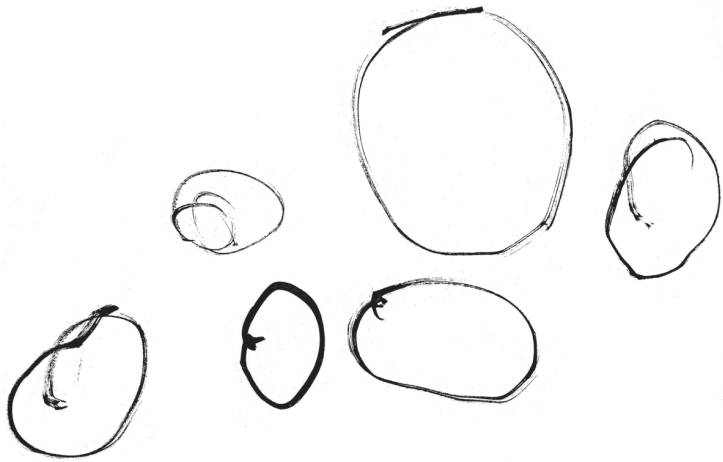
「ことばが生まれるすじみち」3巻シリーズは、世界がことばや記号によって意味化されるとはどういうことなのかという問いを発生的に追求する「発生的記号論」の試みである。それは、人と人が文脈のなかでどのようにコミュニケーションし、どのように語るようになるのかと問う「発生的ものがたり論」の試みでもある。ことばとは何かという問いは、自己がどのようにして生まれ、社会的ネットワークのなかでどのように他者とかわっているかという関係論とむすびつけられる。したがって、このシリーズは「発生的自己論」「発生的関係論」の試みといってもよいだろう。

第1巻『ことばの前のことば——うたうコミュニケーション』では、ことばが出てくる前段階としての0歳後半の発達を考えてきた。この第2巻では、1歳前半に焦点をあてて『ことばのはじまり——意味と表象』について考えてみたい。1歳代には、ことばと表象によって意味世界ができるのと両行して、重要な心理的発達がみられる。それは「私」というものが現れてくることである。それについては、1歳代から2歳前半の発達を扱う第3巻『ものがたりの発生——私のめばえ』を参照いただきたい。

I

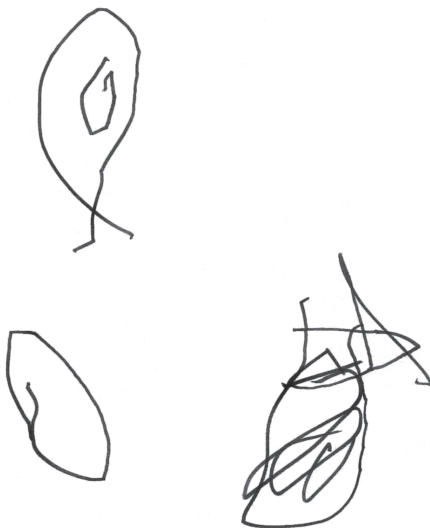
ことばのはじまり

ことばが生まれるすじみち2



第1部

名づけのはじまり



(かな 2歳)

鳥は生を名づけない

鳥はただ動いているだけだ

鳥は死を名づけない

鳥はただ動かなくなるだけだ

谷川俊太郎 「鳥」

1章 ことの端としてのことば

1 片言の時代

■名前と意味

ものにはすべて名前がある。今、私の目の前にあるものは「机」とか「本」というような名で呼ばれている。人にもすべて名前がある。私たちは子どもが生まれると、まずその子に名前をつける。

名前というものがなぜあるのか、改めて考えてみれば不思議である。しかし、名前がなければどんなに不自由かはすぐわかる。生まれたばかりの赤ん坊の世界には、名前がなかった。私たちは第1巻『ことばの前のことば』では、0歳児とともに名なしの世界に住んでみた。これから、ことばが生まれる現場に立ちあい、乳児の心理世界がどのように変わるのかをみていきたい。

ことばの基本的な働きのひとつは、ものごとを叙述し「名づける」ことにある。名づけるためには、名づけられるものが必要だが、それは、外界にある個々の具体的な物、見る物、聞く物、触る物にひとつひとつ